

発掘調査の概要

藤原宮跡大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次）

2009年7月から開始した大極殿院回廊の調査では、回廊および関連する遺構を確認したあと、藤原宮の造営に関わる遺構を追求するため、10月より大極殿院内庭や朝堂院朝庭に敷かれた礫を一部取り外し、下層遺構の調査をおこないました。

昨年度の朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）では、藤原宮の中軸のやや東を南北に通る幅4m、深さ2mの運河が、大極殿院南門の南において方向を変え、北東方向へ延びる幅約2m、深さ0.7mの斜行溝として、掘り直されたことが判明しました。

今回の調査では、この斜行溝が南門を避け、南北溝（幅3m、深さ1.2m）として北へ延びていく状況が明らかになりました。さらにこの南北溝は、回廊の南において回廊建設地を避け、東西大溝（幅3.5m、深さ0.9m）へと付け替えられていました。

これらの運河、斜行溝～南北溝、東西溝は、資材運搬や排水を目的として掘られたと考えられます。これら遺構の前後関係から、大極殿院南門近辺の造営過程がより具体的にわかってきました。はじめに運河を利用して、遠方より朝庭部分に資材を運び込みます。そして南門を建設する際には、運河を埋め立て、斜行溝～南北大溝として掘り直します。次いで回廊を建設するため、回廊以北の南北大溝を埋め立て、東西大溝に付け替えます。最後に、造営に使われた溝を全て埋め立て、朝庭の広場部分を造成し、礫で舗装する、という順序で造営されたようです。

調査中は、藤原宮跡に蓮やコスモスの咲く時節で、調査地にも多くの皆様が立ち寄られました。また、去る11月29日の現地説明会では、950人もの方々にお越しいただき、大変盛況となり、一同感謝しております。
（都城発掘調査部 高橋 知奈津）



調査区全景（西から。右のL字溝が造営期の大溝）